

昭和34年9月、近江八幡市水茎町。伊勢湾台風で日野川が決壊し、軒下まで浸水した。(提供：滋賀県)



特集

淡海の川

水害、そして川とともに生きる

水害・利用・自然 川にはさまざまな側面がありますが、川に対する人びとの意識もさまざまです。今回のギャラリー展では過去の大きな水害を地域の人々がどのように経験してきたのかを中心に、滋賀県の川を広く紹介します。身近な自然である川に目を向け、水害の経験に学びながら、私たちが川とどのようにつきあっていくのか一緒に考えてみたいと思います。



主任主査 武部 強 (河川工学)

本当にもう水害は起こらなくなったのでしょうか？

滋賀でも昭和28年(1953)の13号台風や昭和34年(1959)の伊勢湾台風など昭和20年代から昭和40年代は何度も大きな水害に見舞われてきました。(図 1)一瞬にして尊い命や財産を奪ってしまう水害は被災された方にとって、いつまでも消えることのない痛みとして心に深く刻み込まれています。ところが滋賀県では、この30年間、大きな水害はまったくといっていいほど起こっていません。そのため、もう水害の体験は過去のことと思われるかも知れません。

たしかに過去の水害をきっかけとして多くの川で治水が行われ、水害に対する安全性は向上しました。しかしながら、水害の可能性がなくなった



昭和32年、瀬田川(大津市)で洗濯する女性たち (撮影：前野隆資)

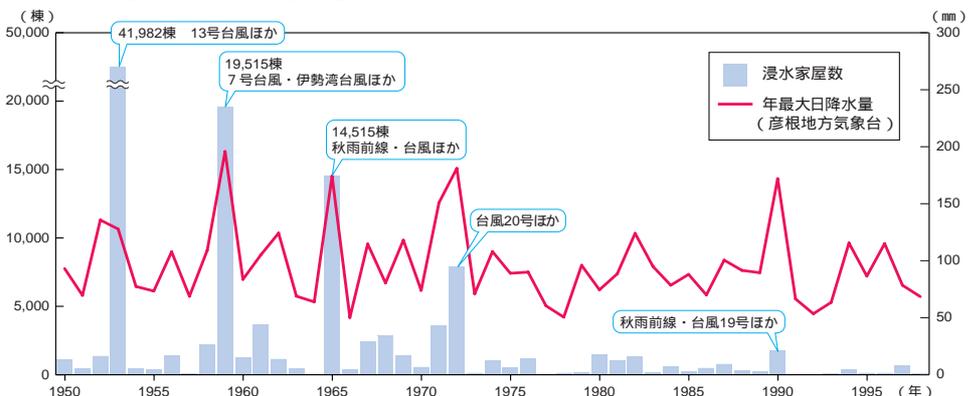
とは言えません。じつは過去に大きな水害をもたらしたような大雨がこの30年間は降っていないのです。昨年の日本は、梅雨期の集中豪雨や初夏から秋にかけて多くの台風が来襲し全国各地で大きな水害が発生しました。幸い滋賀県では大きな水害は起こ

りませんでした。10月20日に近畿に上陸した台風23号では近畿北部に深刻な被害をもたらす結果となりました。もし、大雨が降って川が氾濫したら 私たちは過去の水害を見つめなおし、水害に対する人びとの対処やそのための工夫をしっかりと記憶にとどめておかなければなりません。

人びとと川のかかり

一方、日常の暮らしと川の関わりを振り返ると、今から30〜40年前まで人びとの暮らしに川は密着した存在でした。暮らしに川を利用することで人びとは川と深くかかわりあい、身近な自然として川とつきあってきたのです。現在では蛇口をひねればいつでも水を手に入れることができるようにな

図 - 1 浸水家屋棟数と年最大日降水量



参考文献：『滋賀県災害誌』、同続編・第3部・第4部 (注：1965年以前は主として戸数)

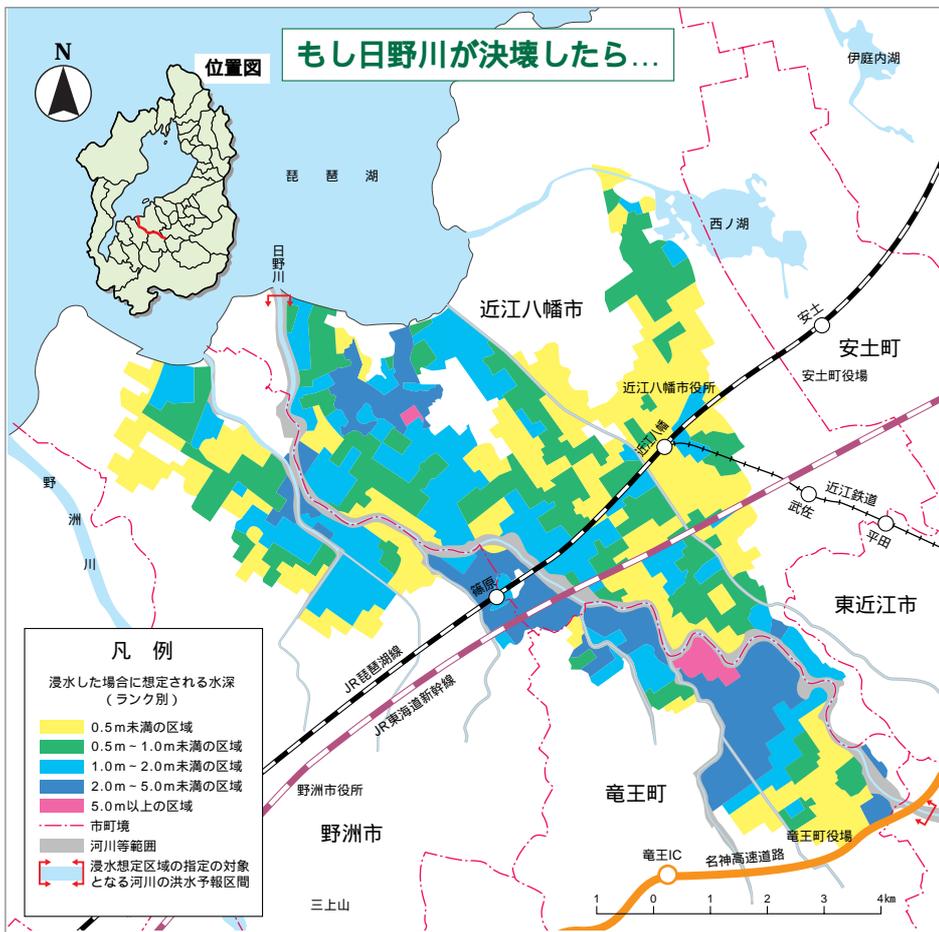


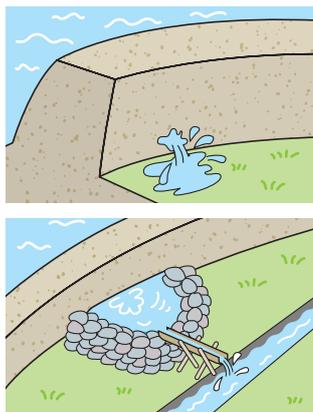
図 - 2 日野川浸水想定区域図(50年に1回程度起こる大雨により氾濫した場合に想定される浸水状況図)

氾濫原に住んでいる人々 少しでも水害を防ぐために

川は、貴重な自然であり私たちに様々な恵みを与えると共に災害をもたらす存在でもあります。水稲栽培を主体とした弥生時代以降、日本列島に暮らす人々は生活用水・農業用水を求めて水辺近く(氾濫原)に住んでいました。そして、現在も私たちは水に恵まれたこの氾濫原を高度に利用し続けているのです。このことから、水害は日本に住む人々の宿命であり、現代の豊かな生活も潜在的に水害の危険性をはらんでいるのです。

氾濫原に住む以上、水害をゼロにすることは不可能です。洪水が起こってもそれが水害とならないよう、あるいは被害を少しでも減らすように工夫をこらしていくことが重要です。

月の輪工

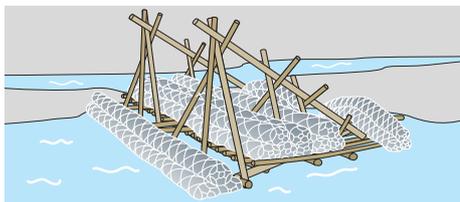


川の水位が高いと、水が浸透し堤防の裏側から漏れ出ることがあり、放置すると堤防内の砂が流れ壊れてしまうことがあります。

そこで、水の勢いを小さくするため、土のうを積み水を貯め川との水位差を小さくし堤防の決壊を未然に防ごうとするものです。

「自分で守る」(自分自身です)、「自分で守る」(自分と家族の安全を守る)、「自分で守る」(自分が動けなかつたら、誰が助けてくれるでしょうか) 洪水のように広い範囲で災害が起これば、行政は救済を必要とされる全ての人に同時に手をさしのべることはできません。その時、頼りになるのは近所同士の助け合いです。また、地域の水防活動が減災には大きな力となります。「社会で守る」(ハード対策だけで

聖牛工



伝統的な河川工法の一つで、武田信玄の創案といわれ、三角錐をなし、棟木の長さにより「大聖牛」「中聖牛」などがある。聖牛は、その構造が簡単であるにもかかわらず堅牢で、前面の洗掘を受けて前に傾斜してもよくその型を保ち、目的を達する。一般に急流河川の砂礫の激しい所の水制、締切工事などに適している工法である。

「社会で守る」(ハード対策だけで) 「自分で守る」(自分自身です) 「自分で守る」(自分と家族の安全を守る) 「自分で守る」(自分が動けなかつたら、誰が助けてくれるでしょうか) 洪水のように広い範囲で災害が起これば、行政は救済を必要とされる全ての人に同時に手をさしのべることはできません。その時、頼りになるのは近所同士の助け合いです。また、地域の水防活動が減災には大きな力となります。「社会で守る」(ハード対策だけで)

これからの川を考える

水害・利用・自然 川にはさまざまな側面がありますが、川に対する人びとの意識もさまざまです。今回のギャラリー展では過去の大きな水害を地域の人がどのように経験してきたのかを中心に、滋賀県の川を広く紹介します。身近な自然である川に目を向け、水害の経験に学びながら、私たちが川とどのようにつきあっていくのか一緒に考えてみたいと思います。